ハウス・オブ・ザ・イヤー2014結果を公表

（一財）日本地域開発センターによる、省エネ住宅のトップランナーを選定する表彰制度「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー（HOY）2014」の受賞結果が公表された。外皮と設備を一体評価する表彰制度として認知度が高まっており、有効応募件数は前年から倍増。省エネ住宅の普及促進に貢献している。

「ハウス・オブ・ザ・イヤー・イン・エナジー2014」受賞結果

	企業名	シリーズ名	地域
大賞 2件	アエラホーム	クラージュ（プレミアム仕様）	3-7
	ヤマト住建	エネージュUW	6
特別優秀賞 24件（右は抜粋）	一条工務店	i-cube	1-7
	岩手ハウスサービス	FORA NEXT＋	3
	金子建築工業	土塗り壁高断熱の家	5
	泉北ホーム	フル装備の家	5・6
	パナホーム	カサート　エコ・コルディス	4-6
	LIXIL	スーパーウォール工法「プレミアムパッケージ」	6

ほか、優秀賞（68件）、精励賞（1件）、地域賞（4件）、優秀企業賞（27件）、審査委員賞（3件）

ホームページ http://www.jcadr.or.jp/ で公開中

応募件数倍増、地域工務店の応募が増加

HOYは今回で7回目の開催。事務局では「平成25年省エネ基準に先立って、外皮の断熱性と設備の省エネ性を一体として捉えて住宅性能の評価を行ってきた」と先進性を自負する。募集は地域区分・シリーズ別の単位で行っており、今回の有効応募件数は102件と前回（57件）のほぼ倍増。受賞により自社のフラッグシップ商品のPR力が強まると注目されており、今回は地方部の小規模工務店からの応募が増加する傾向にあった。2015年度の開催も決定しており、応募要領は9月にホームページに掲載予定。

審査にあたっては、審査委員会委員長の（独）建築研究所・坂本雄三理事長をはじめ3名の専門家が、3つの視点で審査した。視点別の点数配分は①外皮・設備の省エネ性能値（60点）、②数値化しにくい多様な省エネ手法の導入（20点）、③省エネ住宅の普及への取り組み（20点）―とした。③の評価に当たっては応募シリーズの供給棟数と全供給棟数に占める割合の2つで評価し、中小規模の会社に不利にならないよう配慮している。

普及の取組、高評価

事務局によると、全体の断熱性能が年々上昇傾向にあり、平成25年省エネ基準達成レベルより断熱性能が50％以上高い住宅が応募の大半を占めた。

大賞を受賞したヤマト住建の「エネージュUW」は内・外ダブル断熱工法などの採用により外皮平均熱貫流率U_A値を0・27（W／㎡・K）に高めた。昨年から販売開始しており、「他ラインアップでも断熱性能を向上させていることなど、省エネ住宅普及の取組みも高く評価された」（同社）。

特別優秀賞の一条工務店は断熱性能ではトップだったが、昨年の応募と同仕様であるため大賞の評価から外された。ただ、受賞した「i－cube」が全供給棟数に占める比率は非常に高く、事務局では「海外工場で断熱材を自社製造していること等が、普及率向上につながっている」とみる。

同じく特別優秀賞の泉北ホームの「フル装備の家」（右記事参照）も、樹脂サッシの全棟標準化やエネファームの大幅な普及価格低減など、「群を抜く価格努力で、審査委員から省エネ住宅の普及に大きく貢献していると注目された」（事務局）。

地域独自の省エネ工法も

「断熱と蓄熱のバランスに優れた取り組み」として高評価を受けたのが、特別優秀賞と地域賞をダブル受賞した岐阜県恵那市の工務店・金子建築工業の「土塗り壁高断熱の家」だ。

金子一弘社長によると「当社のある東濃地域は年間の寒暖差が大きく日射量も多い。断熱性能のみを高めると中間期に、熱が室内にこもって暑くなりすぎてしまう」という。

「土塗り壁高断熱の家」は、U_A値0・35（W／㎡・K）と高断熱ながら、熱容量の大きい土塗り壁に日射熱溜めることで中間期も快適な室温を維持できる。土塗り壁は調湿効果も高く、上位グレードに搭載するダイキン工業の住宅用全館調湿・換気ユニット「DESICA HOME AIR」との併用により、相対湿度を通年で40％～60％の範囲を維持できると実証した。さらに朝晩の気温差を活かした排熱換気も採用。ルームエアコン1台で全館24時間冷暖房を実現しつつ、各住戸1～1・5kW程度の太陽光発電の搭載で年間の暖冷房消費電力をキャンセルできている。

地域の他の工務店の省エネ技術向上にも取り組む。塗り壁に適した地域産の土を活かした「地域型省エネ住宅」の工法や設計手法の講習会を行っており、これまでに同工法で100棟以上の住宅が東濃地域で建設されているという。

「地域型省エネ住宅」の施工実習の様子（金子建築工業）